

清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（3）

The Eight Legs (Initial Leg, Revealing the Theme, Middle Leg, Later Leg) and Summary Leg of the Qing Dynasty Eight-legged Essay (3)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

（vi）『論文約旨』

江蘇金匱の張泰開の『論文約旨』は、起股（提股）・出題・中股・後股・結束（收股）を次のように解説する。

まず、起股（提股）について、次のようにいう。

〔論起股〕起股（提股）の首は、須く入題を緊頂（ひっぱり承ける）して端を發し、入題無き者は、起講を緊頂して説き下り、一路 引きて題面に到るべし。如し起講 已に反なれば、則ち起股（起股） 再び反なるを得ず。重複を避けるを以てなり。切に寛衍（だらだらと続く）を忌む。或いは二比を渾發にし、大帽子（文のまくら）の話を作り、全く貼題せず、題意を將つて説き盡くすに及ぶあり（『論文約旨』「論起股」条・不分卷・五葉）。

起股は、入題を承けて始める。入題がない場合は、起講を承けて説き始める。起講で反法を用いたならば、起股では反法を使えない。重複を避けるためである。

（1）張泰開（？～乾隆三十九年九月・八十六歳歿）は、乾隆七年壬戌科（一七四二年）二甲二名の進士である。この『論文約旨』に付された龐鍾璐による同治五年（一八六六）八月の識語には、次のように言う。

〔『論文約旨』は〕錫山の張有堂（張泰開）先生 畿輔を視學する時（順天學政：乾隆十五年〔一七五〇〕～乾隆十八年〔一七五三〕在任）、刊して以て諸生に示す者なり。〔それらは〕皆な前人の論文の旨を取りて、其の今に宜しき者を擇びて之を言い、明白に曉暢す。童蒙 悟る可く、〔八股文の〕名家 亦た其の範圍を出ずる能わず、誠に舉業の正軌なり……（張泰開『論文約旨』不分卷・十六葉）。

これによると、『論文約旨』は乾隆年間に刊行されたようである。しかし、乾隆年間刊本を見ることができなかったため、拙稿では同治五年刊のものを用いる。

だらだらと説明しない。もしくは、二比をひとまとめにして説き、論説のまくらとし、題目にはふれず、題意のみを用いて論述するものもある。

出題については、次のようにいう。

〔論出題〕 題句 當に図圖（そっくりそのまま）に出すべき者有り・當に逐字ごとに拆開（弁別）して出すべき者有り。總じて題情の何如なるかを看る。入題 已に見過（見たことがある）なるが若ければ、此に至りて必ずしも再複せず……（『論文約旨』『論出題』条・不分卷・五葉）。

出題には題目の文字をそのまま用いる形式のものがあり、一字ごとに弁別して説明する形式のものもある。総じて言うとな題情がどのようなものであるかを見るものである。

中股については、次のようにいう。

〔論中股〕 點題の後、中股 當に正起すべし。題義を闡發（解明）するに、間 反起を用いる者有るは、乃ち是れ題意に緊對（ぴったりと対応）すればなり。反透の法を用うれば、前の如く半篇の反法を得ず。其の一氣 相い貫かんと欲せば、一つの妙法有り。點題の後、意中に「何也」①の二字を藏有し、然る後に中股を^な做せば、則ち突兀（突然）にして起す②、或いは反起を用うと雖も、自ずから出題の神氣と隔たらず。股頭の起句 勢い有るを要し、通股を領得して起すは、平塌なるを要せず、用意を要し、著率の筆（書き方）を得ず。題の正面を發揮（展開）するは、全く此の處（中股）に在りて、題中の然る所以の故を説透す。〔また〕飽滿（豐滿）精湛（広く深い）にして、能く要言 具に^も擧げしむること、煩詞を待たず。若し切題（題旨にぴったり合う）の痛癢（必要性）に関わらず、但だ題の字面より話句を填湊（集める）して敷衍③すれば、便ち是れ空殼子（抜け殻）にして、文を成さず。股末 當に題の如く收住（しっかり止める）すべし。未だ題に到らずして便ち止む・既に題に到りて止めずを得ず。又た題に語助（助詞）の字の^{とど}住むる者有れば、當に題に照らして押住す、或いは言下に於いて添毫法を用い、以て其の神に^に肖すべし。其れ長股 語助（助詞）を用いずして

住脚（止まる）する者有り。近今の習いなり。天・崇〔明の天啓・崇禎年間〕・國初の名家 何ぞ嘗て此の如くあらん（『論文約旨』『論中股』条・不分卷・五葉～六葉）。

①何也：『讀書作文譜』に「上文に順いて問を作すの辭」（『讀書作文譜』卷之七・十三葉）。

②起：『分體辨類利試文中』（乾隆八年〔一七四三年〕序）に「按ずるに「起」に二有り。一篇に就きて言へば、則ち起比（提股） 是れなり。一股に就きて言へば、則ち起句 是れなり。全篇の勢 起比（提股）に在り。或いは反あり、或いは正あり。必ず虚をして迂遠ならず、簡にして局促（小さくまとまる）ならず、題の巔に高踞し、衣を千仞の勢いに振う有らしむ。凡そ中〔股〕・後〔股〕の文字 皆な此に安根伏線し、又た一語もて實を占むること無ければ、乃ち勢を得ると爲す。一股の勢に至るに、則ち全く起句に在り。此の句 睽^こけ^{そむ}げば、則ち一股 皆な睽^{くら}き、此の句 晦^{すなわ}ければ、則ち一股 皆な晦し。故に或いは反、或いは正、或いは借、或いは襯を論ずる無く、皆な必ず全股の大意を渾舉し、高唱して入り、以て後の勢に乗じて抒發（表現）すれば、自爾（これより）便^{すなわ}ち利あり。若し此の處に於いて低頭の勢を作し、閉口の腔（ふし）を唱うれば、下面 便ち手を措き難し」（積秀堂刊『分體辨類利試文中』卷一・十二葉）。

③敷衍：『斯文規範』に「股中に在りて題面を敷衍するを言う」（『斯文規範』卷之三・十八葉・「一曰敷衍」条）。

中股は、題目を提示してから、正法を用いて題義を明らかにする。反法を用いることもある。一氣をつらぬくために、「何也」の気持ちをもって中股を作成すれば反起などを用いてもかまわない。中股のはじめ数句は、勢いがあることが必要である。おわりの部分は、題目の言いまわしのようにして、はっきりと止める。

後股については、次のようにいう。

〔論後股〕後股 須く中股に就きて、逼りて進一層①し、以て題中の未だ盡

さざるの蘊を發すべし。或いは上文を歸繳（もどって提出する）す、或いは下文を起注（もち出す）す、或いは題に就きて咏嘆②す、或いは題後もて生發す。其の虛字を用い〔一〕歩を進めて起す者は、「且」字③・「況」字④・「不但此也」字⑤を用い、其の前に向いて推原⑥する者は、「蓋」字⑦・「惟其」字・「若此者」字を用い、後より推原する者は、「是故」字⑧・「是以」字⑨・「是知」⑩字・「乃知」字・「如其」・「使其」等の字を用う。開筆を用いて〔反〕駁して進む者は、「雖曰」字・「如謂」字・「將謂」字・「即使」・「卽有」等の字を用う。既に此の理を知りて、卽ち虛字を用いず、而して平頭^{ふつう}に起す者あり。總じて題後の擴充の法に在るに外ならず。自ずから退轉（戻る）して再び説きて疊牀架屋（屋上屋を架す）に至らず（『論文約旨』『論後股』条・不分卷・六葉）。

①進一層：光緒五年新鐫『初學題類文法合編』に「〔進一層〕題 説くこと此の如し。文 更に一步を追深す。所謂ゆる加倍寫法（加倍^{さらにすすめ}て寫^かくの法）なり……」（『初學題類文法合編』下卷・三葉・「進一層」条）。

②咏嘆：『斯文規範』に「一股中の正意 已^{おわ}に完り、下を以て必ずしも實發せず、然れども體裁・神韻の間、猶お未だ驟に止まる可からずに似たり、故に咏嘆の法を用いて以て其の餘情を盡せば、則ち體裁 舒展し、神韻 悠揚たるを言う。文の人を動かすは、反って前の平實（平凡）の處に在らず、此の虛處に在り。又た須く此の法を曉り得れば、特に股中に之有るのみならず、結束の處に至りても、往往 此の法を多用す」（『斯文規範』卷之三・二十一葉・「一曰咏嘆」条）。

また、『初學題類文法合編』に「〔咏嘆〕前半 實意 已に盡くせば、後半 宜しく實發すべからざるなり。故に詠嘆の法を用いて、以て其の餘情を盡す、或いは反面に就きて感慨して聲情激烈たり、或いは正面に就きて推賛し神韻悠揚たり、或いは後より前に溯りて深く感慕す、或いは彼に借りて此れを證し低昂^{しめ}を見す。之を總ずるに餘

音嫋嫋として、絶えざること縷の如し、皆な題の絃外の音なり。文の人を動かすは、多くは此に在り。其の體 或いは整、或いは散、或いは長、或いは短、則ち拘〔束〕されざるなり」（『初學題類文法合編』下卷・十三葉・「詠嘆」条）。

③且：『讀書作文譜』に「一步を深めるの語。蓋し上に一説有りて、此に更に一説有るなり」（『讀書作文譜』卷之七・十四葉）。

④況：『讀書作文譜』に「況とは、更に進めるの辭。正意 已に足る。而れども意の外に尚お言う可き有れば、則ち之を用う」（『讀書作文譜』卷之七・十四葉）。

⑤不但此也：『讀書作文譜』に「猶お言の此の如きに止まらざるがごときなり。蓋し上文に跟着て引申するの辭」（『讀書作文譜』卷之七・十五葉）。

⑥推原：『初學題類文法合編』に「凡そ題 皆な心位の然る所以有れば、必ず推原法を用う。道 然る所以に出ずれば、方に是れ耿耿たる元精なり。反面推原の二比有る者、正面推原の二比有る者、此れ行文の高人の數籌者なり。記事立案する者に至りては、題面 文字無く、尤も宜しく通體推原するなり」（『初學題類文法合編』下卷・十葉・「推原」条）。

⑦蓋：『讀書作文譜』に「推原の辭。起語の「蓋」字と異なり有り。起語は乃ち空指す。此は則ち實に上文を領するなり」（『讀書作文譜』卷之七・十三葉）。

⑧是故：『讀書作文譜』に「上文を指して推原するの辭。猶お「因此」「所以」云々と云うがごとし」（『讀書作文譜』卷之七・十三葉）。

⑨是以：『讀書作文譜』に「上を指して推原するの辭」（『讀書作文譜』卷之七・十三葉）。

⑩是知：『讀書作文譜』に「上を承けて解悟する所有るの辭」（『讀書作文譜』卷之七・十三葉）。

後股は、中股の論述をさらに一步進めて、題目のまだ言い尽くしていない部分を説明する。題目の上文を持ち出したり、題目の下文を引き起こしたり、題目について詠嘆したり、題目のすぐ後の部分を出したりする。虚字を用いて一步進めて論述するときは、「且」・「況」・「不但此也」を使う。題目の前に推原してゆく時は、「蓋」・「惟其」・「若此者」を用いる。後ろから推原してゆく時は、「是故」・「是以」・「是知」・「乃知」・「如其」・「使其」等を用いる。反駁して論述する時は、「雖曰」・「如謂」・「將謂」・「即使」・「即有」等を用いる。虚字を用いないこともある。こうしたことはすべて題目のすぐ後の部分を拵げて充実させるためである。

結束（收股）については、次のようにいう。

〔論結束〕先輩 文を論じて、束股（收股）は八股の内に在らずとす。所謂ゆる八股なる者は、或いは起股・中股の交界^{さかい}に二股有り、或いは中股・後股の交界^{さかい}に二股有るものなり。之を總ずるに淺より深に入り、神明（考え方）

其の人に存す。按ずるに先輩の文 亦た束股を以て八股の數に備うる者有り。要するに再び前文を足らし、遺漏無からしめ、以て後勁（殿の精兵）と爲す所以なり。若し既に足れば、用いざるも亦た可なり、天・崇（明の天啓・崇禎年間）以來、六股多し。結句に至るに或いは題旨を繳（提出）す、或いは章旨・節旨を顧み、多くは破〔題〕・承〔題〕、或いは起講と相い應づ。〔題目の〕下文 題の去道（進む道）と爲すが如き者は、須く落清すべし。若し各々頭項（主要なもの）と爲す者は、必ずしも管とせざるなり。虚縮題に至れば、通篇 俱に下文を注意し、題の勒注の如くす。篇末に至りて必ず下文を將^もって點出（要点を示す）し、通篇 乃ち歸宿（落着き先）有り。俗法に題句^もを將^もって一呼して住^{とど}むは、極めて理を害すと爲す。先輩^{なみ}の無する所、宜しく之を戒しむべし（『論文約旨』『論結束』条・不分卷・六葉）。

結束（收股）を八股の中にいれないこともある。というのも、起股と中股、もしくは中股と後股との間にすでに二股を用いて論述する部分を作っているからだという。ただ、それは作者の考え方次第である。また、八股の数に入れる人の考

えによると、結束は、これまでの文を補足し、遺漏がないようにして、しっかりとした殿（しんがり）とするものであるという。結束に至るまでに言いたいことを尽しているならば、結束を用いなくてもよい。末尾は、題目の要旨や題目そのものが含まれる章・節を考慮して作り、破題・承題・起講と呼応させる。

（vii）『初學文法入門醒』

四川雲陽縣の喬峯秀の『初學文法入門醒』（同治六年〔一八六七〕重鐫）は、起股（提股）・接股・出題・中股・後股・束股・小結を次のように解説する。

まず、起股（提股）について、次のようにいう。

〔起股〕起股とは、乃ち題意を領起するの謂いなり。起講 自ずから一局（一部分）を成す。起股は則ち合わせ、中〔股〕・後〔股〕と共に一局を成し、文章入路の始めと爲す。總じて宜しく題〔目〕の前に在りて着意（氣にかける）すべし、預め題義を將^もつて發し盡し、以て題〔目〕の正位を侵占するを致す可からず。惟れ題の筋絡の處を擇び、一提して之を綴^{つら}ね（『斯文規範』に「綴は、聯なり」卷之五・三葉とあるによる）、之を叩きて其の動くを欲し、之を呼びて其の醒むるを欲さしむ。然る後、中股 吾が正發を用う可し。其の法 上文より落脉する者有り、本題に就きて意を取る者有り、全く正提を用いる、或いは全く反振①を用いる者有り、兩股の一淺一深・一虛一實②、或いは一開一合③・一反一正④なる者有り。題面を分拆して逐字ごと逐層ごとに引き入る者有り、一意もて兩層を翻作⑤すること、連環（連続していること）迴抱（取り囲む）するが如き者有り、題外に客意を設け、題意を襯醒（際立たせてはっきりさせる）する者⑥有り、輕利（軽やかにする）に宜し、或いは渾重（重々しくする）に宜しき者有り、總じて題を相して之を爲すに在り。而して其の最要の處は、股末の一句に若くは莫し。或いは反、或いは正なるは、本題の神と相い迎えて聲 相い應ずるを要す。恰好（ちょうど）出題の句に緊接し、躍躍（生き生き）として出でんと欲するの勢い有らしむれば、則ち出題 勢に借りて一點（要点を示す）し、觀

る者 目を醒まさざるは無し（『初學文法入門醒』不分卷・四葉・「起股」条）。

①反振：『斯文規範』に「振は、動なり。字面に於いて未だ之を出さず、先ず反筆を用いて以て題中の字面を振動するを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十五葉・「一曰反振」条）。

②一淺一深・一虚一實：『讀書作文譜』に「〔淺深虚實〕唐彪 曰く、文章は實に非ざれば、以て義理を闡發（解明）するに足らず。虚に非ざれば、以て神情（表情）を摇曳（揺れ動かす）するに足らず。故に虚實 常に宜しく相い^{わた}濟るべきなり。淺は以て其の大槩を指陳し、深は以て其の精微を刻劃す。故に深淺は相い離る可からざるなり、と。 又た曰く、淺深虚實は古今の文の大綱と雖も、然れども其の槩を約畧するに四端を出でず。虚より實に入る、淺より深に入り、俟序（順を追って）漸進（次第次第に進む）する者有り。一虚一實、一淺一深し、相間（交互）に文を成す者有り。此の二者 人皆な之を知る。變體に至れば、則ち前幅は實義 已に盡き、後幅は虚に駕して空を行なわざるを得ざるものの、或いは旁意を襯貼（際立たせてくっつける）す、或いは餘情を推廣する者なり。前半 刻意深く入り、後半 復た深くす可き無く、輕描淡寫せざるを得ざるものの、或いは古昔を援引す、或いは他事に附帶する者有り。此の二者 人を知ることに少なし。然れども四者の結構 同じからずと雖も、而れども當理（合理的で）合宜（ふさわしい）なるは、則ち一なり。能く斯の理を悟れば、即ち以て淺深虚實の致を盡す可し、と」（『讀書作文譜』卷之七・一葉・「淺深虚實」条）。

③一開一合（闔）：『斯文規範』に「前の一股が是れ開、後の一股が是れ闔（合）なるを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一開一合闔」条）。

④一反一正：『斯文規範』に「前の一股が是れ反、後の一股が是れ正な

るを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一反一正」条）。

- ⑤翻作兩層：『斯文規範』に「一層の翻駁する中に於いて、能く兩層の意を翻弄し出すを言うなり。宋學顯の「丹之治水也愈於禹」（『孟子』告子下）題文の如きは、起講の下、起講を緊接して云う「乃ち或いは禹を推して以て功の首と爲す」と。此れ是れ題中の「愈」字もて翻駁す、乃ち題中の一層の意なり。下 此の一句を接して云う「禹は難を治め丹は易きを治むを以て、禹は遠きを治め丹は隘きを治む」と。却って能く兩層を翻出す。此れ即ち一層もて兩層を翻出するの法なり」（『斯文規範』卷之三・十八葉・「一曰一層翻出兩層」条）。

- ⑥題外設客意襯醒題意：『斯文規範』に「一股中の實意 已に完り、復た説く可き無し。更に股尾に於いて題の外もて題の中を襯起（際立たせる）するを言うなり」（『斯文規範』卷之三・二十葉・「一曰題外陪襯」条）。

起股は、中股・後股と合わせてひとつとなるものである。始めの部分であるので題目の実質的な内容について論述してはならない。題目のポイントをおさえはつきりさせて、中股で実際に論述する。様々な解法があるが、題目をみて決めればよい。最も重要な箇所は、股末である。ここで、題目のポイントと適応させることが重要である。そして、出題の句に近づけて、出ようという勢いを持たせたならば、出題の部分は、うまく要点を示すし、読者をハッとさせることができる。

提股と出題との間に置く接股については、次のようにいう。

〔接股〕接股とは、起股の後なり。或いは題を將って全出するに便ならず、故に又た接するに二股を以てするもの、或いは反接①を用いて以て其の勢いを蓄うるもの、或いは先ず虚にして、漸く實となりて以て其の氣を養うものの、或いは兩句もて一束に作るもの、或いは四句もて一頓に作るものあり。總じて輕・圓・靈・捷・紓・徐・頓・宕なるを要す。文氣をして圓足せしむれば、題句 自然に落出す（『初學文法入門醒』不分卷・四葉～五葉・

「接股」条)。

- ①反接：『斯文規範』に「唐翼修 曰く、反接とは、既に題位に^な做し到るも正接す可からざるを言う。正接すれば、即ち下文を侵す。更に題の反面より生發するは即ち反接の法なり」（『斯文規範』卷之四・二十四葉・「一曰反接」条）。

接股は、提股の後ろにおくものである。輕・圓・靈・捷・紓・徐・頓・宕であることが必要である（詳しくは（v）『啓悟集』「虚股」条参照）。

出題については、次のようにいう。

〔出題〕文に出題有るは、猶お畫龍點睛①がごときなり。破〔題〕・承〔題〕より以後、文 半篇を成すも、題の全身 未だ現われず。故に起股（提股）の下に必ず出題を用いて、以て之を醒ます。其の法 順點・倒點・反點・借點・全句點・零碎點有り、皆な正格なり。又た逐股（股ごとに）題を講〔解〕す・逐股（股ごとに）題を出す者有り。題 一句ならず、前面に一半を出し、後面に一半を出す者有り、一句題の中 截斷す可く、遂に分かちて兩截し、前後點次する者有り、更に全篇養局し、只だ渾講を用いて直ちに篇中に至りて方^{まさ}に出す者有り。此れ又た變にして其の正を失わざるなり。之を總するに、如何に點注するかを論ずる無く、務めて點じ得て目を醒ます・點じ得て自然にして、出ださざるを得ずの勢い有らしむるを要すること、點睛して飛ばんと欲するの樣子の如くす。更に入題と搖し相照應するを要すること、彼 呼び此れ應じるの樣子の如くす。蓋し入題・出題の兩處乃ち應試の最も要緊の關節なり。初學 務めよ【割注：神明をして其の間に變化せしむれば、方に妙なり】（『初學文法入門醒』不分卷・五葉・「出題」条）。

- ①點睛：『斯文規範』によれば「虚字を作す者 既に先ず虚字の神を發出し、随えば即ち點題（題目の要点を示す）すること、猶お龍を畫く者 既に先ず龍の全身を畫き出し、随いて即ち點睛するがごときを言うなり。故に點睛と曰う」（『斯文規範』卷之六・十九葉・「一曰點

晴」条）。

八股に出題の部分があるのは、ポイントとなる言葉を持ち出して文章を引き立たせるようなものである。文は、ここに至るまですべて書き出していないので、出題を用いて、はっきりさせる。要するに、ハッとさせるように要点を示したり、自然な形で要点を示したりして、題目をはっきりさせないといけなような勢いを示すことが大事である。出題は入題とともに、受験の際の最も肝心かなめのところである。

中股については、次のようにいう。

〔中股〕中股とは、乃ち題の正位、人の腹有るが如きなり。作文 此に至り須く全副^{すべて}の精神を聚め痛切に發揮（論述する）し、實處を抜きて詮理（説明）し、虚處において傳神①す。務めて圓滿（完全で）②飽綻（溢れるくらいに）し、言わんと欲する所を暢（よく通じる）せしめ、題をして毫も滲漏（破綻）なからしむれば、方^{まさ}に本題の正位を失わず。其の法 一柱を確立す、或いは一議を創す、或いは一字^{つまみだ}を拈す、或いは一事を擧げて、用いて一股の綱領と爲し、下面 此れに接して之を發する者有り。大約〔中股の起承轉合については〕 起の處は宜しく鬆（緩める）なるべし、承の處は宜しく暢なるべし、轉の處は宜しく捷（迅速）なるべし、合の處は宜しく穩なるべし。務めて格調をして森然として亂さざらしむれば、方に有制の師と爲す。而して起の處は、任意に掀翻（ひっくり返す）して股末に至ると雖も、必須^{かなら}ず勤めて題位に還すべし。蓋し正位を以て中股を完え、餘意を以て後股を留むればなり。亦た四股を運作し、前後 淺深・虚實を分かち、題を行なう者有り。更に碎股法を用いて逐層（層ごとに）逐步（一步一步と）題を行ない、總じて題の正位を失わざる者有り。此れ又た題を相して之を爲すに在り。一定に拘〔束〕されざる可からざるなり（『初學文法入門醒』不分卷・五葉～六葉・「中股」条）。

- ①傳神：『初學題類文法合編』に「〔傳神〕神は宜しく強旺なるべし、宜しく清秀なるべし、宜しく幽閒なるべし。一題 手に到れば、必ず

我の精神を聚め、古人の精神を會す。斯れ古人の胸臆^かを寫くこと、己の胸臆を寫くが如くす。字字の精神、語語の精神、洋洋灑灑として、心膽 俱に張る。豈に快事に非ずや」（『初學題類文法合編』下卷・六葉・「傳神」条）。

- ②圓滿：『斯文規範』に「辭氣 充滿して、少しの欠缺の氣無く、神完（氣力が満ち満ちている）に足るを言うなり」（『斯文規範』卷之七・三十七葉・「一曰圓滿」条）。

中股は、重要な部分なので、全力を集中して作るべきである。完璧な状態にして、意味がよく通じて、題目の内容を破綻なく論述できれば、題目の正しい意味を失うことはない。中股は、起承轉合の四段落に作り、だいたいにおいて、起の箇所はかるやかで、承の箇所はよく通じるようにし、轉の箇所は軽やかにし、合の箇所は穏やかにする。しかし、これらにも様々な解法があり、題目を見て判断すべきである。

後股については、次のようにいう。

〔後股〕後股とは、乃ち中股を承接して、其の餘の意を發する者なり。題の要旨 中股に發洩（明らかに示す）して已に盡き、思路 幾んど窮まる。作文 此に至りて必須^{かなら}ず愈々出して愈々奇にして、別に新思^のを展^{べつ}べ、別に異采を標し、閱者をして名山に遊ぶに山勢 已に盡き、而して峯迴路轉①するが如く、絶處逢生（活路が開ける）して、人をして「萬壑千叢」（『世説新語』言語）の「應接に暇あらざる」（『世説新語』言語）の趣有らしむが如くすべし。[そうすれば] 斯れ勝觀と爲す。其の法 別に一議を起す者有り、中股の末に接して勢いに借りて翻論②する者有り、本題^もを將って一步を推開する、或いは一步を推進する者有り、其の收處は、上文を歸結する者有り、章旨に照應する者有り、下文を拖起（引き起こす）する者有り、俱に變に通じて之を爲すを要す（『初學文法入門醒』不分卷・六葉・「後股」条）。

- ①峯迴路轉：『斯文規範』に「言うところは、上一層 既に完り、下一層 即ち上面の勢いを承けて、別に一番の意思を轉出すること、峯巒

に遇いて道路無きを苦しみ、身を回して審視するに、路 即ち轉出するが如きなり。後の〔部分にある〕「無中生有」と名を異にして實を同じくす」（『斯文規範』卷之六・二十二葉・「一曰峯迴路轉」条）。

②翻：『讀書作文譜』に「〔翻論〕唐彪 曰く、文章 翻論に假らざる者有り、宜しく翻論すべき者有り。淺に借りて以て深に^{くつがえ}翻す、非に借りて以て是に翻す。^{くつがえ}翻さざれば則ち是なる者は見え、^{くつがえ}深き者は出でず。故に^{くつがえ}翻すに宜しきなり。又た古人の成案を^{くつがえ}翻す者有り。古人の否なる者は、我 之を賢とし、古人の是なる者は、我 之を非とす。理に當れば則ち聖賢の功臣なり。後學の耳目なり。然らざれば、偏蔽の辭を以て、其の臆見曲説を^{たす}佐け則ち人非（人の謗り）・鬼責（鬼神に罪を問われる：『莊子』天道）、必ず免れず。才有る者、深く此に戒めざる可からざるなり、と」（『讀書作文譜』卷之七・五葉・「翻論」条）。

また、『斯文規範』に「翻とは、公案を^{くつがえ}翻すの意なり。此の官 彼の官の案を^{くつがえ}翻すなり。則ち之を文に通ぜしめるなり。凡そ題中の一定の理解は、此れ公案なり。我 一の見解を偏立し^{くつがえ}之を翻す。此の官 彼の官の案を^{くつがえ}翻すと相い似たるに就きて故に之に名づけて翻と曰う」（『斯文規範』卷之七・八葉～九葉・「一曰翻」条）。

後股は、中股を承けて、その足りないところを述べる部分である。題目の主旨は中股において述べてしまっているので、ここでは新奇な論述の仕方を行ない読者に別の新しい展開を示す。解法は様々であるが、新しい展開にもとづいて、用いるべきである。

束股については、次のようにいう。

〔束股〕束股とは、蓋し一篇の局を總じて之を收束する者なり。其の妙處は鬆（緩める）に在らず、緊（ぴんと張る）に在り。務めて全篇の大意を^も將つて收束すること嚴密にし、「餘勇 ^か賣う可き」（まだまだ余裕があるの意：『春秋左氏傳』成公二年の「曰く、勇を欲する者は余が餘勇を^か賣え、と」に

基づく)有らしむれば、方^{まさ}に後に竭くの病を犯さず。其の法 一反一正、或いは一賓一主なる者有り、一股もて本題を束ね、一股もて章旨を繳(提出)する、或いは下文を起す者有り。惟だ機に随いて筆を運べば可なり(『初學文法入門醒』不分卷・六葉・「束股」条)。

束股は、八股の箇所のまとめをする部分である。鬆(緩める)ではなく緊(ぴんと張る)にする。全体の大意を厳密に締めくくりながらも、余裕があるようにすれば、小結で、言うことがなくなってしまうということはない。

小結については、次のようにいう。

〔小結〕結とは、全篇の末なり。或いは一二語を用いて之を結す。其の妙處は緊(ぴんと張る)に在らず鬆(緩める)に在り。或いは直ちに下文に通す、或いは上文に足繳す、或いは本題に就きて結煞す、或いは一句もて間に漾^{ただよ}わす(漾間)。言 已に盡すも、意 窮まる無からしむれば、其の文 短しと雖も、亦た作者の受用の處^{あら}を見わすに足る。初學 切に[この]事を貪了し之を草率にする可からず(『初學文法入門醒』不分卷・六葉・「小結」条)。

小結は、全体の最後の部分である。一二語でまとめる。緊(ぴんと張る)ではなく、鬆(緩める)にする。言葉が尽きても、意味あいが尽きないようにしたならば、短文であっても、作者の気持ちを表わすことができる。

(viii)『夢雲軒管見録』

浙江山陰の張商霖の同治十年(一八七一)刊『夢雲軒管見録』(各頁の柱と封面とは『雲路指南』となっている)は、提二比(起股)・虛股・出題・中股・後股・束股・小結を次のように解説する。

まず、提股(提二比)とその後ろに置く虛股(接股)とについて次のようにいう。

提二比は正に文章の初めて講に入るの處なり。虛を貴びて實を貴ばず。短を貴びて長を貴ばず。然れども虚は迂遠なる可からず。短は局促(小さくまとまる)なる可からず。其の法 上文より翻^{くつがえ}し入る者有り、本題に就き

て講入する者有り、截して題〔目〕の上層を講ずる者有り、題〔目〕の下層を逆にする者有り、専ら題〔目〕の眼目に注^{そそ}ぐ者有り、先ず題〔目〕の虚歩を撃つ者有り、雙提①雙反なる者有り、單提單反なる者有り、正提にして反挑②・反提にして正挑する者有り、正提にして正挑・反提にして反挑する者有り。總じて虚實 相い生ずるを要し、開合 自然なるを妙と爲す。其の緊關は最も末句に在り。蓋し末句 能く本題をして隱躍（かすかなさま）に出ださんと欲するの勢い有らしめば、則ち出題の處〔その〕勢いに借りて一點（要点を示す）し、觀る者 洞心爽目（目を清々しくするように感じさせる）ならざるは無し。

提股の後、舊と虚股有り。蓋し題股の意 未だ盡くさざる有りて、出題 太はだ^{せま}偏るを恐る、故に虚股、或いは兩句の相い對す、或いは四句六句の相い對すを用いて、題に就きて逐層（段落ごとに）點出し、姿態（風格）局度（文の構成）有らしむるなり。〔しかし〕近ごろの文 多く此れを用いず。然れども其の法 知らざる可からず（『夢雲軒管見錄』卷五 逐條啓蒙・七葉～八葉「題股法」条）。

①提：『初學題類文法合編』に「題前に提振（提唱）す。獨り大題に宜しきのみならず、即ち小題にも亦た之を宜しくす。文章の中間に至りては、毎に提筆を用いる者有り、或いは數語を提して以て下を開く、或いは提二比 以て前に應じ後に伏す。總じて筋有り骨有るを要す。簡勁（簡潔で力がある）老當（円熟する）なれば、^{まさ}方に能く勝ちを制す」（『初學題類文法合編』下卷・十葉・「提筆」条）。

②反挑：『斯文規範』に「挑とは、挑撥（けしかける）なり。字面 未だ之を出ださざるに於いて、先ず反筆を用いて以て題中の字面を挑撥するを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十六葉・「一曰反挑」条）。

提股（提二比）は、始めの部分である。虚であり短であることが求められる。ただし、虚であっても題目の実際とかけ離れたり、短であっても小さくまとまてはいけない。提股の重要なところは、末句にある。末句で題目について、わず

かでも出ようという勢いがあれば、つぎの出題はうまく要点を示すことができ、読者にすがすがしい感じを与えることができる。また、提股の後に本来は虚股（接股）があった。

出題については、次のようにいう。

出題を作文するは、猶お畫龍點睛①がごときなり。破〔題〕・承〔題〕より此に至り、文 半篇に幾し、而れども題の全身 未だ現れず、故に出題を用いて、以て觀る者の目を醒ます。其の法 題字を將^もつて順い出す者有り、題字を將^もつて顛倒し出す者有り、止だ題の緊要の字を出す者有り、本題を全出し、而して復た餘の意を以て之を補う者有り。此の外、又た逐股（股ごとに）に點出する者有り、題の一句ならずして、前半後半もて分出する者有り、一句題有れば、前半後半もて分出する者有り、通篇 養局して、末に至りて方に全題を出す者有り。總じて作者の文に臨みて變化するに在るのみ（『夢雲軒管見録』卷五 逐條啓蒙・八葉～九葉「出題法」条）。

①96 頁①参照。

八股に出題の部分があるのは、ポイントとなる言葉を持ち出して文章を引き立たせるようなものである。この部分に到り、全体の半分近くなるものの、題目の全てを説き尽くしていない。そこで、出題の部分を作り、見る者の目を醒ます。様々な解法があるが、作者が題目を見てどのようにするかにかかっている。

中股については、次のようにいう。

文の中股有るは、猶お人の腹心有り・室の堂奥有るがごとし。一篇の大局・一題の大義 皆な此に於いて之を發す。一筆も簡略なる可からず。須く^{すべて}全副の精神を聚めて、本題を將^もつて詳細に體貼（理解）し、痛切に發揮（論述する）し、實處に於いて詮理（説明）し、復た虚處に於いて傳神（真髓を伝える）すべし。務めて圓滿（完全）に曉暢（精通）して、毫も滲漏（破綻）なからしむれば、方^{まさ}に題に負かず。每股の文字 俱に當に柱を立つべしと雖も、而れども中股 尤も緊要と爲す。法 每股の開手（手始め）の處に於いて、或いは一議を創す、或いは一字^{つまみだ}を拈す、或いは一事を提し、[そ

うしてそれらを」立てて一股の綱領と爲す。股中の意義は、即ち此れに借りて之を發し、題意より柱を立てる者有り、題面より柱を立てる者有り、註の意より柱を立てる者有り、上文下文より柱を立てる者有り。總じて宜しく題「目」と比附すること確切（適切）なるべし。其の起承轉合に至りては、務めて格調をして森然（こんもり茂り立つさま）とせしむれば、方に有制の師と爲す。前半の股は任意に翻掀（ひっくり返す）すと雖も、股末はかならず必須ず題意に勒還（引き締めてもどす）すべし。蓋し正意を以て中股に還し、餘意を以て後股に留むるなり。亦た虚縮題及び實題有りて正旨の下文に在る者は、股末に畧ぼ一句を用いて點透す。之を總ずるに極意は下文に取り、仍お是れ一意もて本題を抱くなり。又た中股の正意 已に足る有れば、却って「非然」①・「否則」②等の字を用いて、一筆を反掉する者は、股法の活變（便法）なり（『夢雲軒管見錄』卷五 逐條啓蒙・九葉～十葉「中股」条）。

①非然：『讀書作文譜』に「前説 已に是なり。特に一反を作りて、以て前説の辭を申べ、猶お此れに如かざるが若しと言うがごとし」（『讀書作文譜』卷之七・十五葉）。

②否則：『讀書作文譜』に「否は然らざるなり。猶お此れに如かざれば則ち云云と言うがごとし」（『讀書作文譜』卷之七・十五葉）。

中股（中比）は八股の中の重要な箇所なので、すべての精神を集中して作成しなければならない。題目の内容に精通して、破綻がないように作る。すべての八股の部分は、柱を立てる（二本の柱を立てるように対句にする）のであるが、特に中股で柱を立てることは重要である。立てかたはいろいろとあるが、題目と結びつけて適切なものとすべきである。中股における起承轉合は、森がこんもり茂り立つようにする。中股の前半は、好きなように書いても、末尾ではしっかりと題目の内容と合致させる。題目の中心となる内容は、中股で説明し、残りは後股で行なう。

後股と束股とについては、次のようにいう。

後股は乃ち中股を承接し、其の餘の意を發する者なり。題の要旨 中股發洩（明らかに示す）し已に完^{おわ}り、此に至りて思路 窘竭（尽きてしまう）に幾し。知らざるや文章は福命に關するを。必ず首より尾に至るまで轉轉として窮まらざるを乃ち福文字有りと稱す。作者 須く別に新思を展べ、^{べつ}別に異采を標（表明）す、或いは題面を旁襯（わきから際立たせる）す、或いは中股に接して〔その〕勢いを借りて翻掉す、或いは本題を將^もつて推開し一步もて深く一層を進む（一步深進一層）、或いは題中の下截の意を發す、或いは前に順闡を用いる者は此に逆發を用い、前に分疏を用いる者は此に合講を用う、或いは股首に推原①・推廣②を用い、翻論引証し、下 題面を以て之を足らす、又た或いは上半股 已に題義を將^もつて説き完^とる者は、下推原・推廣・詠歎③・襯貼、及び翻進一層等の法を用い、以て之を足らす。總じて要するに關る者をして名山に遊び、山勢 已に盡き、峰回路轉すれば、別に洞天 現われ、人をして「萬壑千巖」（『世說新語』言語）の「應接に暇あらざる」（『世說新語』言語）の趣有らしむるが如し。斯れ文章の大觀と爲す。其の股末の收煞（終りの部分）は、上文を歸結する者有り、章旨に照應（呼応）する者有り、下文を拖逗（引き伸ばす）する者有り、盡さんと欲して盡さず、故に摇曳（揺れ動かす）を作りて以て生姿（すばらしい形を示す）する者有り。題情・文勢を審らかにし之を行なうを貴ぶ。

後股の下、兩句もて一股、或いは三四句もて一股を作る者、之を束股と謂う。乃ち一篇の局を總じて、收束する者なり。其の法、或いは一反一正、或いは一賓一主、或いは本題を一結して章旨を一繳す、或いは本題を一結して本題を一透す。但だ近ごろの文、束股有る者、甚だ少なし。故に作らざるも、亦た妨げあらざるなり（『夢雲軒管見錄』卷五 逐條啓蒙・十葉～十一葉「後股法」条）。

①推原：91 頁⑥参照。

②推廣：『初學題類文法合編』によれば、「題の後 推開して之を言え
ば、自然と綽として餘地有るなり……（『初學題類文法合編』下巻・

十葉・「推廣」条)。

③詠歎：90 頁②参照。

後股は、中股で言い尽くしていないことを論述する部分である。様々な解法を用いて、読者に終わりかなと思ったら、別に新しい局面が現れるというような気持ちにさせることがよい。文末の部分は、上文をまとめたり、題目のある章に呼応させたり、下文を引っぱってきたり、言い尽くさずにすばらしい形を示したりする形式のものがある。後股では題目の意味や文章の勢いをはっきりさせることが貴ばれる。束股は一篇のまとめを行なう部分である。同治（一八六二年～一八七二年）の頃には、束股を作る者は、たいへん少なくなってきた。だから、束股がなくても別に問題はない。

小結については、次のようにいう。

股數 已に完^{おわ}れば、單に一兩句を結ぶ、或いは數句を結ぶ、之を小結と謂う。

下文を直透する者有り、上文を繖足する者有り、本題に就きて收束する者有り。用筆に姿態（風格）・神情（表情）有るを要す。最も直率なるを忌む。

總じて一段を^{つく}做る者の若きは、大結と謂い、常には用いざるなり（『夢雲軒管見録』卷五 逐條啓蒙・十一葉～十二葉「結法」条）。

小結は、一二句あるいは三四句でまとめをする部分である。下文にまで言及する形式や、上文にからめる形式、題目そのものを締めくくる形式のものなどがある。書き方に風格や表情があるようにし、率直にするのを避ける。

（つづく）